

Kappa Novels



とう さん さい なぞ
唐三彩の謎

いし ざわ えい た ろう
石沢英太郎



カッパ・ノベルス

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 ^{とう}唐 ^{さん}三 ^{さい}彩 ^{なぞ}の謎

¥430

昭和48年9月10日 初版発行

著者

^{いし}石 ^{ざわ}沢 ^{えい}英 ^た太 ^{ろう}郎
福岡県筑紫郡太宰府町五条
星ヶ丘27号

発行者

五十嵐 勝 彌

印刷者

鈴木 貞 三 郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所 東京都文京区音羽2
振替 東京115347

株式会社 光文社
電話 東京(942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Eitarō Isizawa 1973

(分)0-2-93(製)02239(出)2271(0)

^{とう} ^{きん} ^{さい} ^{なぞ}
唐三彩の謎

^{いし} ^{ざわ} ^{えい} ^た ^{ろう}
石沢英太郎

目次

プロローグ

5

第一章 三彩の誘いいざな

29

第二章 京都へ

55

第三章 三彩は招く

80

第四章 香港ホンコンへ

105

第五章 三彩の秘密

141

第六章 沖ノ島おきしまへ

183

エピローグ

224

イラストレーション

下高原 健二

プロローグ

(1) ひとつの事実

(この記事は、「九州日日新聞」文化欄に連載されたものである)

「唐三彩」が、世界で四番めに、九州の玄界灘の孤島「沖ノ島」で出土したのは、昭和四十四年十月十一日のことである。

発見の状況は、劇的なものがあつた。沖ノ島が「海の正倉院」として、曙光を浴びたのは、戦後である。昭和二十九年から、何回も調査が行なわれてきた。万を越えるおびただしい出土品に、学界は眼を見はつた。

四世紀から七世紀にわたる祭祀品の数々が、歴史の謎を秘めて、ほとんど無疵に、この孤島に眠っていたわけであつた。

昭和四十四年秋の第三次調査は、第一回予備調査が四

月、第二回が五月、本調査は十月に開始され、九州大学教授岡崎敬隊長の指導のもとに、金銅製品竜頭・雲珠などの珍しい祭祀遺品が発掘されていた。

それは十月十一日のことであつた。

その日、私(記者)は、こういう状況を見た。陶芸研究家として著名な小山富士夫氏は、第5号遺跡にいた。

小山氏は、出土したひとつひとつの遺品を、丁寧に点検していた。

腰をかがめて、小山氏は、褐色の土の中から、小さな緑色の陶器のかけらを、そつと手にとつた。眼鏡をかけたりはずしたりして、その破片の鑑定を始めた。

小山氏の眼が光つた。

思わず小山氏は、土の上に坐りこんでしまった。

これが唐三彩発見の歴史的瞬間だったのである。

みんなは小山氏の傍によつた。

「やはり……そうだ」

小山氏の手にある緑の破片を見て、松本熊本大学教授が呟くように言った。

静かなざわめきが、ちょうど来島中の三笠宮を初め、

調査団の間に流れていった。そのざわめきには、たいへ

んなものが見つかったという、緊張と興奮があった。

岡崎隊長が、記者にそつと教えてくれた。

「世界にもまれな唐三彩であることが、確認されたんですよ」

岡崎隊長の表情にも、興奮と喜びがあった。

現に、確認者の小山氏は、その後、発刊された調査報告に、一文を寄せ、その冒頭に、

『玄海の孤島沖ノ島からは、いろいろと珍しいものが発見されているが、唐三彩十八片が発見されたということは世界を驚かすビッグニュースである』

と述べている。

唐三彩は、いうまでもなく、中国の唐の時代（七世紀から九世紀の初め）につくられた陶器である。緑、黄、白の三彩のくみあわせで作られた陶器であり、その色彩は華麗の一語につきる。

唐時代の天子や貴人に愛好されたといわれ、墳墓に副葬品としておさめられた。焼造温度は低く、もろくて実用品には適しない。

だが、この三彩をもって作られた陶器の種類は実に多く、壺、瓶を始めとして男女の人形、馬、牛、犬、獅子、

ラクダから、香炉、皿などの器物にまで及んでいる。

しかし唐三彩が発見されたのは比較的新しく、二十世紀にはいつてからだ。

いまから約五十年前、清朝の終わりのことである。中国では、開封から洛陽にいたる汴洛の工事が始まった。

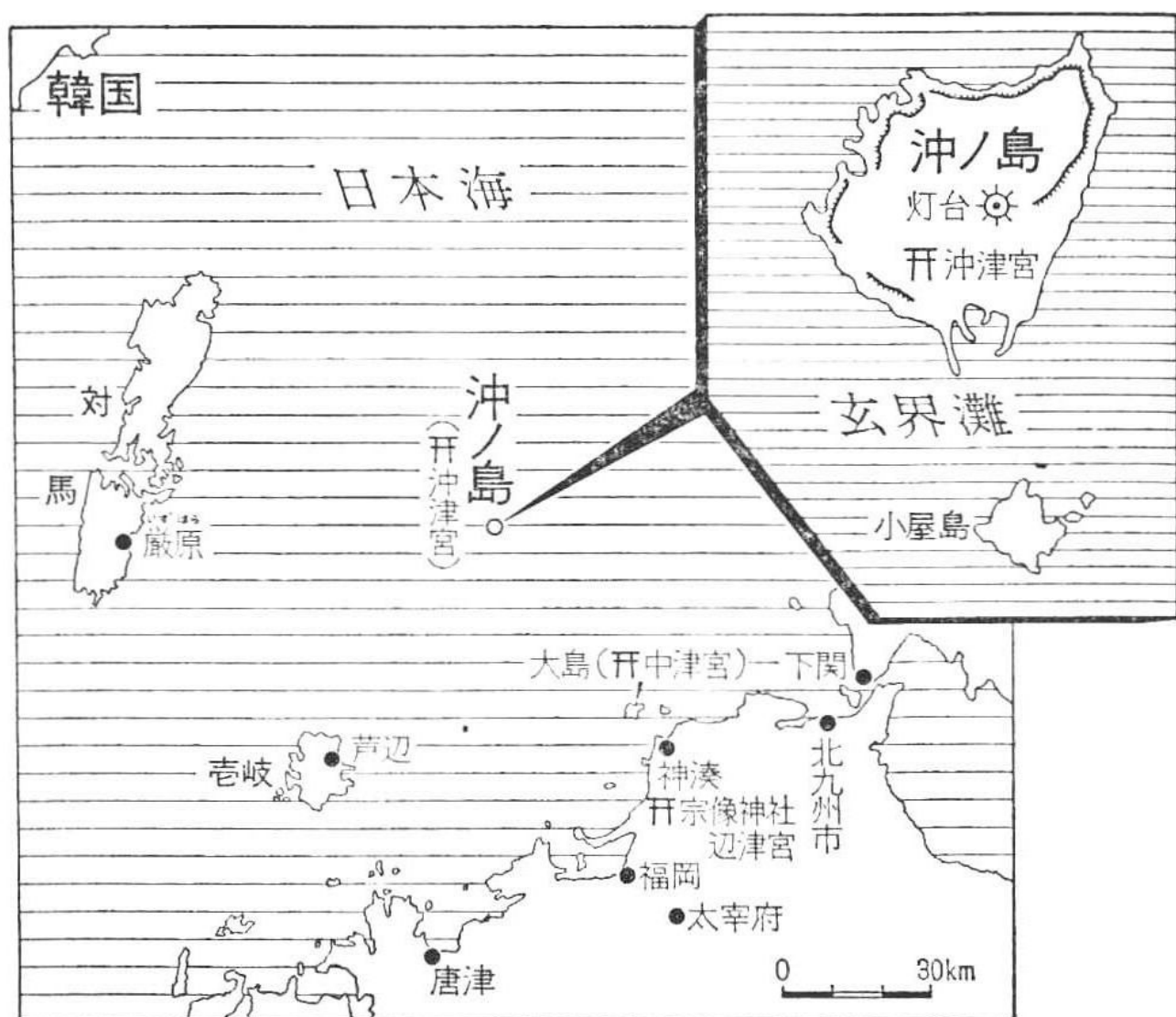
この工事で、洛陽城北を掘り返していたとき、多数の墳墓が露呈した。洛陽は、漢・隋・唐時代の墓域で、有名なところである。

この唐墓から唐三彩のかずかずが、初めて発見された。一千年もの間、地下に眠っていた唐三彩は、その美しい色彩を、世界の人々の前にあらわしたのだ。

この唐三彩の美しさは、ただちに人々を魅了した。世界中の好事家は、中国に殺到した。いま、世界のめぼしい博物館で、唐三彩が観賞できるのも、このときの乱掘・散逸によるものだ。

が、出土地域は、洛陽、長安、西安と、盛唐時代の都市近郊に限られている。

唐時代はまた絹路によって西洋と東洋とが結ばれた時代でもある。芸術的にも完成度の高いこの唐三彩が、その当時、文化交流として、他に運ばれる可能性があっ



たのではないか、という推測が、発見以後も、専門家によって語られていた。

というのは、唐の越州青磁、広州白磁が、遠くインド、パキスタン、イラク、エジプトに運ばれていた実証がある。

第二次大戦後の昭和三十年、スウェーデンの考古学者マルティン博士が、カイロの南郊のフォスタットで採集した陶片約三千点の中に、美しい破片二つが目立った。

これが唐三彩だった。

外国で初めて発見された事例であり、世界で第二番めに当たる。

唐三彩は、作られた当時から、海を渡っていたのである。しかも遠くアフリカの辺境まで……。

昭和四十二年二月、奈良大安寺の遺跡調査が行なわれた。そのとき、当時、平城宮跡調査部長の杉山信三博士により、発見されたのが、日本で初めての唐三彩百二十余の細片であった。

細片から、原型はいずれも俗に『書枕』とよばれている長方形の小箱と推定された。だが、残念にもその細片は、火災にあって、焼けただれていた。唐三彩独自の、

眼をうばうような色彩の美しさは、その彩面から汲みとることができなかった。

いずれにしろ、これが世界での、第三番めの発見であることはまちがいなく、唐三彩が、日本に渡来していることは、これで、確かめられた。

沖ノ島の発見は、第四番めに当たる。

沖ノ島の場合、口縁部の破片だけだったが、幸いにも、色彩は失われていなかった。

復原したその色を鑑賞すると、遠く思いは古代にさかのぼるような、おおらかな気持ちに誘われる。

淡く沈んだ薄い緑の色——それが茶の色と見事に融けあい、鈍い白色が加わることによって、幽幻とも思われる古典美を漂わしている。一体に唐三彩の色彩は絢爛豪華であるが、この沖ノ島出土品は、沈んだ雅味がある。

ここで唐三彩の色彩の歴史を少し述べたい。

陶器が鮮かな混交色をもったのは唐三彩が最初だが、ここにいたるまでは、埋もれた経路があった。

唐三彩の釉は低火度でできている。

中国は、青磁などの高火度製陶技術は進んでいて、その起源は紀元前一千年の殷・周時代にさかのぼるが、低

火度釉はおくれていた。

漢・魏・晋の時代に、鉛釉を酸化炎で焼く方法はこころみられていたが、製品の色は、にごっていて、生地も荒かった。

緑の釉、黄色の釉、白い釉の三色が単独にできるようになったのは隋の時代である。

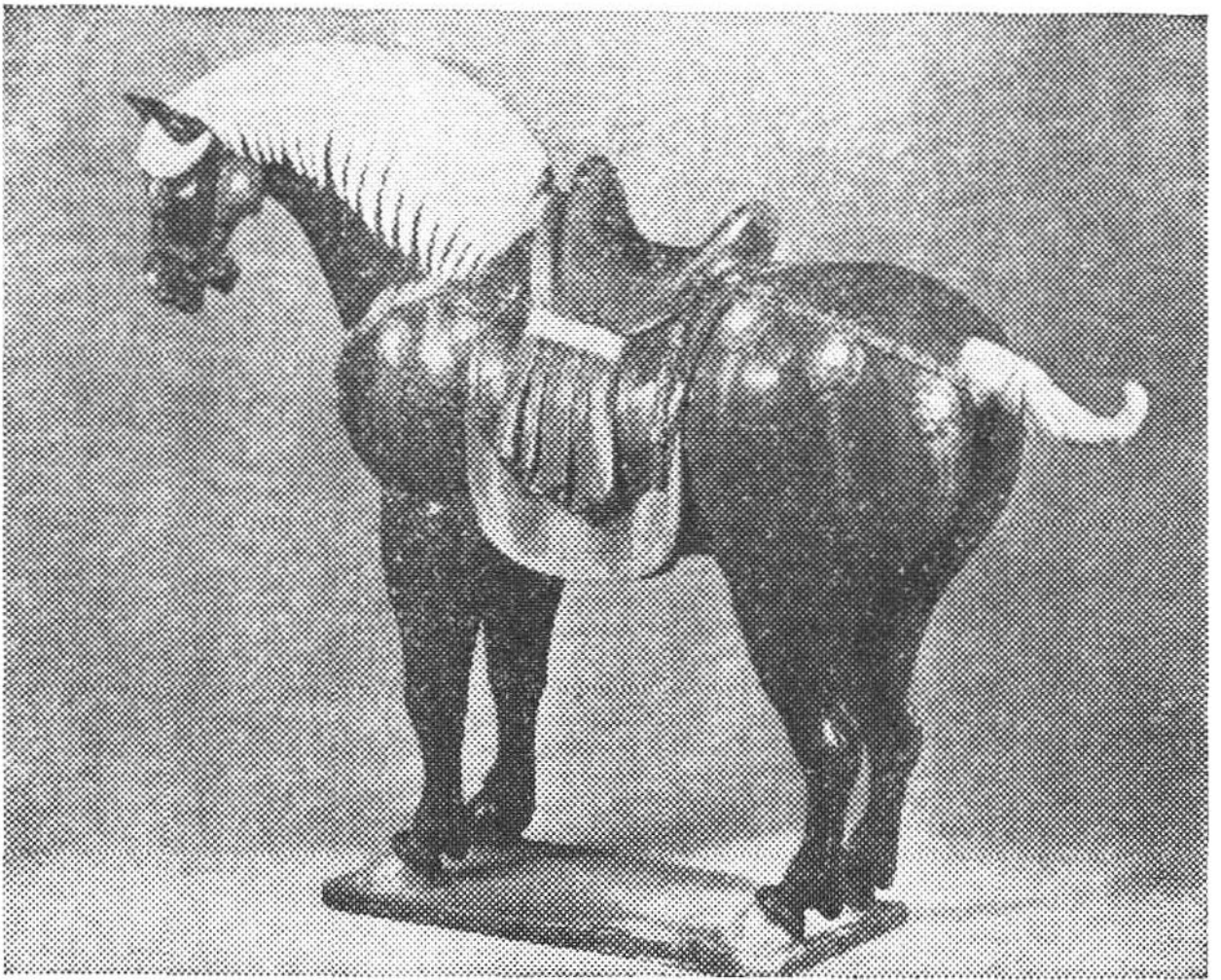
この色彩を交合し、完成させたのが、唐の時代であり、いわゆる唐三彩である。

しかし、三彩といっても、色の判定には、各論がある。緑と茶と白の三彩とみる人もいる。が、緑と赤と黄と解釈する人もいる。原色から一段と昇華した色彩は、単純に判定しにくい。別な言葉で言えば、それだけ微妙をきわめた色彩であるとも言えよう。

盛唐の華やかな文化は、この唐三彩によって実を結んだ。そしてこの唐三彩は、たいへんな影響を当時の各国にあたえた。

奈良時代に作られた日本の『奈良三彩』別称正倉院三彩は、あきらかに唐三彩の模倣である。

現在まで奈良三彩の出土は、瀬戸内海の大飛鳥が最高だが、全国的にいつて、三十カ所ほどある。



三彩馬（中国出土文物展より）

この沖ノ島調査でも、いままで、身十一個体、蓋六個体分の奈良三彩の小壺が出土した。

色合も黄、緑、白が鮮かに出ており、短い外開きの口縁部に、いくぶん肩の張った胴部がつづき、底には高台がついている。

唐三彩に色彩において、一步ゆずるとはいえ、それを擬視していると「匂うがごとき奈良の都」の幻想は、じゅうぶんにイメージされる。『渤海三彩』『遼三彩』『ペルシャ三彩』もまた唐三彩の影響を受けている。古代の文化の交流は、われわれの思いのほか、敏速かつ広範に行なわれていたようだ。

ペルシャ三彩と唐三彩との相互影響は、なお科学的考究が必要とされるが、『点文』などの一致から、ペルシャのほうが、中国の意匠をまなんだと解されている。

いずれにしろ唐三彩は、陶器に『色』と『美』を生み出したことで、世界芸術史上の評価は決定的であるといえよう。

唐三彩を出土した沖ノ島は、玄界灘に浮かぶ絶海の孤

島であり、官幣大社宗像神社の「ご神域」である。

東西約一キロ、南北〇・五キロ、周囲約四キロの小島である。

古代から連綿としてつづいている宗像神社は、三宮を一体としている。

陸地の宗像郡の田島に辺津宮、海岸近くの大島に中津宮、そして沖ノ島に沖津宮が鎮まっている。

この沖津宮（沖ノ島）に古代の祭祀遺跡があることは、すでに江戸時代に貝原益軒が注目し、早くも青柳種信は実際に島に渡って調査している。くだって、明治・大正時代には、江藤正澄・柴田常恵氏が関心を喚起し、戦前には、田中幸夫、豊元国氏らの調査があった。

しかし、この沖ノ島が、古代遺跡の宝庫として確認されたのは、昭和二十九年、宗像大社復興期成会が、小島鉦作氏を団長とし、現地主任に鏡山猛氏が当たった、第一次調査のときであった。

千古の謎を秘めた秘境沖ノ島は、学術のメスが入られ、二万一千点の国宝・重要文化財の遺物を出土、「海の正倉院」として考古学界を驚嘆させた。

出土品の磨滅・破損も少ない。『奈良三彩』『須恵器』

など復原可能のものが多い。

沖ノ島がこのように完全な遺跡を保存できたのには、いくたの理由がある。

沖ノ島は千年にわたって、禁忌の島であった。

この島では、一木一石たりとも手をつけてはいけないとの、神律があった。

江戸幕府初期、黒田長政が、

「私はキリシタンだからよかろう。神のたたりはないはず」

と沖ノ島から神宝類を持ち出したところ、ただちに妖変があったとの、伝説もつたえられている。

また、この島は「女人禁制」であった。

全国にも女人禁制のところは多いが、いまでは、たいてい開放されている。だが、この沖ノ島は、二千年にわたり牢固としてこの禁令をまだ守りつづけている。

とにかく、掟のきびしい島である。

島にあがるには「みそぎ」をしなければならぬ。貝原益軒の『筑前続風土記』には、

「……ここにくる人は、まづ海水を浴び、正三位の社に参り、七日の間、毎日一度、海水を浴び、第八日目に本

社にまうづ……」

とある。

いまでは、ここまでやかましくはないが、厳然として「みそぎ」の慣例は守られている。

調査団員も、全員、想像以上に冷たい海水にひたり、からだを清め、そののち、上陸している。

そのほか、タン、ツバを吐いてはならない。用便も、社務所のほかではまかりならぬ、とのたいへん厄介な掟がある。

こういうきびしい戒律が、この沖ノ島の祭祀遺跡を保たせたといえる。

沖ノ島は、また巨岩と原始林の島でもある。

鬱蒼とした深緑の原始林。

急傾斜で海におちこむ断層。

ずっしりと威圧感を与える荘厳と神秘。

原始林には、熱帯性シダ植物の『オオタニワタリ』が、ぶ厚い葉を一メートルもひろげているし、とにかく公害を知らぬ緑の色は一段と鮮かである。

沖津宮付近には巨岩が群れている。祭祀遺跡の多くは、この巨岩の陰から発掘された。

沖ノ島祭祀が『巨岩祭祀』といわれるのもここからきている。

おそらく古代人は、この巨岩に、畏れにも似た信仰をいだいたのだろう。

島に上陸した三笠宮も、

「古事記などに「いわ」ということばをよく見る。古代人の岩への信仰も、ここにくると、よくうなずけますね」

と第一印象を語った。

いったい人が住めるのかと疑われる、この沖ノ島に、こんどの調査で、縄文土器、弥生土器が発見された。縄文時代の人たちは、海に出て、魚をとることは知っていた。が、近代装備の漁船すら、よほど条件がそろわねば島に近づこうとしないことを考えると、ちっぽけな舟で、よくもこの島に渡ったと、不思議に思わざるをえない。

とまれ、原始時代からこの島は、『祭祀の島』であり『生活の場』でもあったわけだ。

またこの『古代の祈り』が、なんであったかも疑問である。航海安全の祈り、あるいは、朝鮮進出のいくさ神の祈りなど、説はさまざまである。

金銅製の杏葉^{ぎようよう}、雲珠^{うんず}。銅鏡、硬玉の勾玉^{まがたま}、石釧^{いしくしろ}、刀剣など、二万点以上にのぼる祭祀遺品は、この沖ノ島で、大規模な祭祀が行なわれていたことを示している。

唐三彩と並んで『金銅製竜頭^{りゅうとう}』も発見された。この『金銅製竜頭』は、東魏時代（六世紀前半より中葉）の竜頭にきわめて類似し、おそらく六世紀中頃の様式と推定された。

唐時代といえば、すぐ頭に浮かぶのは『遣唐使』だ。唐に着くまで、暴風雨^{あらし}にあつて難破し、死亡する者も多あったという遣唐使である。

この唐三彩も、遣唐使によって、伝えられたものではなからうか？

となると、従来、宗像一族の祭祀とされていたこの沖津宮は、大和朝廷による国家的規模の祭祀ではなかったろうか？

——というように、唐三彩の発見は、古代日本のロマンにもかよい、われわれをイメージゆたかにさせる。

かくして、沖ノ島遺跡調査は新しい謎を生んだ。

縄文・弥生の時代から、古代人は、なぜこの不自由な小さな島に住まねばならなかったか？

いつ古代人は、この島を去ったか？

そして、発掘された唐三彩自体にも謎がある。

唐三彩は、5号遺跡の西側入口付近より奥壁近くまで小片になって散乱していた。十八片であった。

第二次調査のとき、7号遺跡から、未確認のまま発見された四片をこれに接合するとピッタリ合う。

5号遺跡と7号遺跡は、約二十メートルも離れている。同一個体の小片が、二十メートルもなぜ離れて存在したか、これもひとつの謎である。

古代日本の解明に光をあたえた唐三彩発見は、また新しい謎を、呼んだわけであった。

(2) ひとつの鍵^{かぎ}

（中国古典『今古奇観』より）

中国の明代の短編小説を集めた『今古奇観』には、面白い小説が、たくさんのおつている。

第十七話の『蘇小妹^{そしやうまい}』の小品は、とくに、暗号解読的



興趣があつて、ミステリアスな面白さだ。

といつて、味もそつけない、暗号解説でなく、漢文化が熟した当時の、文化エリートの雅味と遊びがある。

蘇小妹は、有名な詩文一家の娘である。

父は、唐宋八大家の一人として文名高い、蘇老泉（蘇洵）。兄の蘇東坡は、一家の中でもとくに傑出した詩人・書家であることは周知のとおり。二番めの兄が、これまた唐宋八大家にはいる蘇頌（蘇頌）である。いわゆる中国文学史上、三蘇といわれる。

蘇小妹も、父や兄におとらぬ、才気があつた。

泰少遊（秦少遊）という秀才から、結婚の申し込みがあり、小妹はいちおう承諾した。少遊は、科挙の試験にも、楽々とおるであろうと注目された、ずばぬけた秀才だった。

結婚式が終わつて、初夜の床入りとなつたとき、小妹は少遊に三つの問題を示した。

解けば、すぐにでも、抱かれるといふのである。

この話は、どうもキザっぽくて、ただけでないが、天下第一流の文人一家ともなれば、こういうときでも、才知を競う風流があつたのだらう。

二つの問題はすらすら解けた。

三番めは、対句の問題だった。

『門を閉ざして推し出す窓前の月』

これに對句をつけるのである。均衡のとれたものでなければ、釣合いがとれないし、テストともなれば、前句を圧倒する機知が欲しかった。

少遊は、秀抜な発想を得られないまま、月明の庭で、悩みぬいた。

蘇東坡は、この妹婿の様子を見ていた。

東坡はふとヒントが湧いた。

しかし、少遊に教えるわけにはゆかない。カンニングは、創意を尊ぶ、その時代の第一流の文人には、許されない。

庭に、花を生ける甕がひとつあつて、ゆたかに水が張りつめていた。蘇東坡は、小石を拾つて、ポンとその甕に投げた。

水が割れ、映っていた月影が、めちやめちやに崩れた。そして水の滴が、少遊の袖をぬらした。

少遊は、瞬間、パッと閃くものがあつた。